寄稿 Contribute

グラバー親子と長崎経済

長崎総合科学大学　人間環境学部
教　授　　ブライアン・バークガフニ

Brian Burke-Gaffney
1950年　カナダ・ウィニペグ市生まれ
1972年　ヨーロッパ、インド等を経て来日
1982年より、長崎在住
1985年より、長崎市嘱託職員
1996年　長崎総合科学大学　地域科学研究所教授に就任
現在、同大学人間環境学部・環境文化学科教授、長崎大学非常勤講師、放送大学非常勤講師、長崎日英協会理事など

はじめに

大陸に近い日本列島最西端の港である長崎港は、何世紀にもわたって世界への唯一の窓口としての役割を果たしてきた。市の中心部から少し離れた港の南側には、南山手として知られる山腹の住宅地が港を見下ろす。かつてこの辺りは、隣接する大浦川周辺の平坦地、更に東山手と呼ばれる向かい側の山腹の住宅地と相まって、華やかな西洋人居留地を形成していた。

現在、南山手の大部分を占める広大な観光施設「グラバー園」の中枢となるのは、コロニアル風の木造バンガロー式住宅「旧グラバー邸」である。グラバー邸は日本最古の洋館であり、元の所有者でスコットランド人商人のトーマス･ブレイク･グラバーは、後に維新の元勲となる若い志士たちとの交流を温め、この国の近代化に大いに貢献した。また、グラバーと日本人女性の間に生まれた長男：倉場富三郎は長崎の発展に彫の深い陰影を与えた。

勲二等旭日旭日重光章を授与された
トーマス・グラバー

トーマス・グラバーの長男
倉場富三郎

グラバー親子の活動と日本の近代化に対する貢献は多岐にわたるが、ここでは、近代長崎の三大産業と言われる造船、漁業、観光を個別に取り上げ、グラバー親子二代90年間の足跡と長崎経済への関わりについて述べたいと思う。

造　船

トーマス・グラバーは、日本が国民の海外渡航を禁じ、中世封建制度の影を引きずっていた時代に英国人船員や機関士を雇い、数多くの艦船をこの国へ運び入れ、航海術を初め様々な技術を指導した。グラバー商会など長崎の外国系商社を介して購入された最初の頃の船の多くは西洋で建造され中国海域で使用されていた中古船であったために、故障が絶えなかった。本格的な修船場の必要性が叫ばれ始めた慶応２年（1866年）、グラバーは薩摩藩の友人・五代友厚、小松帯刀らと共に、南山手の先にある小高い丘のふもと小菅の小さな入江に、大規模な修船場を建設する計画を練った。

グラバーは、すべての必要な機器及び備品調達のため、在アバディーンの兄チャールズに連絡を取る。巻揚げ機、ボイラー、チェーン、レールを含めドックで使用するすべての物が、アバディーンの「ホール・ラッセル社」によって製作された。チャールズ・グラバーはそれらの製品を長崎へ急送するために、アバディーンの造船所「アレクザンダー・ホール社」に依頼して５本マストの快走帆船を建造させた。慶応３年（1867年）末、ホール・ラッセル社の技師ウィリアム・ブレイキーは、「ヘレン・プラック号」と命名された快走帆船と共に長崎へ来航。数カ月間、小菅で機器設置の監督を行った。

小菅修船場は、明治２年（1869年）11月、政府によって買い上げられ、官営となった修船場は政府雇用の外国人技師チームによって管理された。その後、明治20年（1887年）には三菱に払い下げられ、急速な発展を遂げていた三菱長崎造船所に吸収される。昭和44年（1969年）、日本政府はソロバン・ドックを国指定史跡とした。

明治時代の小菅修船所（ソロバン・ドック）

今日、ソロバン・ドックはもはや使用されていないが、日本最古のレンガ造りの建物である巻揚げ小屋やボイラー、レール等がそのまま残っている。対岸には、世界最大級の造船所の一つに成長した三菱長崎造船所のクレーンが、港町長崎を象徴するか

のようにそびえ立つ。

明治３年(1870年)、グラバー商会は明治維新後の混乱の中で倒産したが、トーマス・グラバーは、巨大企業に成長しつつあった三菱の顧問としての地位を確立して活動拠点を長崎から東京に移した。その後彼は、キリンビール株式会社の前身であるジャパン・ブルワリ・カンパニの設立に大きな役割を果たし、明治24年（1891年）から同27年（1894年）まで社長を務めた。現在のキリンビールのラベルには、麒麟の顔のまわりを一周する大きな黄色の口ひげが加えられているが、これは、太い口ひげをトレードマークにしていたトーマス・グラバーの貢献に敬意を表してのことだと伝えられている。

漁　業

日露戦争の勝利によって日本が収めた戦果の一つは、朝鮮、中国関東州の近海、更にロシアの日本海側沿岸の海域にまで及ぶ日本の漁業権拡大であった。これらの漁場に近接する九州北部と西部の港は、国内消費用だけでなく、海外向けの海産物積み出し港として飛躍する絶好の機会に恵まれた。

明治40年（1907年）10月、「ホーム・リンガー商会」は、日本で初めて蒸気トロール船を取り入れた「長崎汽船漁業」を設立。新会社の責任者に任命されたトーマス・グラバーの長男：倉場富三郎は、大浦７番地のホーム・リンガー商会本社内で新規事業に着手した。

富三郎は、直ちにアバディーン在住の知人を通じて蒸気トロール船購入の手配をする。トロール漁業が導入されたばかりの当時のヨーロッパでは、アバディーンの造船所が最初の英国製蒸気トロール船建造のメッカとなっていた。同船は海底をさらうように大きな円錐形の網を引き、捕獲した魚を船倉まで引き揚げる装備が施されていた。

明治41年（1908年）５月、169トンの鋼船「ヘネ・キャッスル」が長崎港にその姿を現わす。後に「深江丸」と改名され、富三郎によって招かれたフォード船長他、英国人専門家２名の指揮の下に、長崎県北部の海域で最初の底引き網による実験が行われた。その新漁法はあまりにも革命的な漁獲をもたらしたために、伝統的漁法に甘んじていた地元の漁

日本最初の蒸気トロール船「深江丸」

師たちが抗議。明治42年（1909年）６月、底引き網漁に関する多くの規制事項を盛り込んだ解決案が採択され、両者は和解した。富三郎は更に三隻の蒸気トロール船を輸入。「長崎汽船漁業」は急速に業績を伸ばし、漁業会社のリーダー的存在となった。

最初のトロール船が長崎に入港した明治41年（1908年）は、長崎及び日本の発展における重要な転換期となった。「長崎汽船漁業」設立や画期的な蒸気トロール船の導入はさておき、この年初めて地元造船所の船舶建造総数が輸入船の数を上回ったことは注目に値する。外国の産業や技術に依存していたぜい弱な基盤の立て直しに成功しつつあった。

長崎汽船漁業は４隻のトロール船をフル操業。大量の魚を水揚げした。魚は最初の頃、主として長崎とその周辺地域で消費されていたが、明治45年（1912年）２月、販路拡充をもくろむ富三郎は、大阪市場への試験的な列車輸送の手筈を整えた。この試みは成功し、今日の主要水産県長崎への大きな一歩となった。

観　光

雲仙は、幕末になって外国人が足を踏み入れるようになるまでの数百年間、霧に包まれた霊場と湯治場だった。しかし、安政６年（1859年）の条約港開放後、雲仙を訪れた外国人たちは、ここを、海岸沿いの居留地の酷暑や湿気から逃れて、つかの間の慰安を得ることが出来る理想の地と考えた。19世紀末までには、長崎からだけでなく、上海、香港初め中国、ロシアの東海岸の各港から、あらゆる国籍の人たちが雲仙を訪れ、長崎県の経済発展に多大な貢献をした。

明治44年（1911年）県営公園となった時、雲仙には多くの立派なホテル、ロッジ、温泉風呂、温泉利用のプール、自然の遊歩道、テニス用芝生コート、その他いろいろなレクリエーション施設が既に整っており、西洋人たちの間では極東の最も人気のある避暑地の一つとなっていた。夏の期間中、ホテルに逗留する外国人の数は常に300人を下ることがなかった。

雲仙岳には、森林の中央部に広々と開けた緑の牧草地があり、地元の農場主によって飼われた馬や羊が草をはんでいた。明治末期になると、ゴルフ道具を担いだ外国人たちがこの牧草地を訪れ、自然のままのコースで気勢を上げた。雲仙が県営公園となった後、長崎の主要商人たちは、この牧草地を正規のゴルフコース開設のための理想の地と考え、集会を開いて造成計画を練った。この計画の発起人の中には、長崎県知事、長崎駐在の米国領事カール・Ｆ・ダイクマン、「香港上海銀行」の長崎支店長

C・W・メイなどもいた。しかし、日本人と外国人商人及び役人の間の仲介から、まとめ役に至るまで、実際にすべてを取り仕切ったのは倉場富三郎であった。

大正２年（1913年）８月14日、正式にオープンした９ホールの雲仙ゴルフ場は日本最初の大衆向けゴルフコースとなった。このゴルフ場は、ゴルフそのものが日本人にはまだ馴染みの薄い時代であったにもかかわらず、県営公園内につくられ、当初から地方自治体によって運営された。他のゴルフ場には見られないこのユニークな特性は、根回し役と実質的責任者としての倉場富三郎の尽力に負う所が多い。

昭和２年（1927年）毎日新聞社は、「日本八景」選定のために特別委員会を結成。富三郎は雲仙と長崎を売り込もうと、宣伝キャンペーンに乗り出す。その努力が実を結び、雲仙は日本八景の山岳部門で一位に選ばれた。昭和９年（1934年）には富三郎の努力が更に報いられ、雲仙は瀬戸内海、霧島と共に日本最初の国定公園に指定された。

倉場富三郎は、終戦直後に自らの命を絶った。この悲劇によってグラバー家と長崎の縁が切れたが、南山手の旧グラバー邸は、いち早く脚光を浴びるようになり、長崎の経済へ新たな貢献を始めた。長崎市当局は、グラバー邸の最後の住民となった進駐軍関係者が付けた愛称「蝶々夫人の家」を借りて長崎に観光客を誘致し、未だ復興ならない被爆地の経済の立て直しに着手した。オペラ「蝶々夫人」とグラバー家の関係には何の歴史的根拠がないと歴史家たちなどが反発したので、相反する意見を整理する形で、市当局は「蝶々夫人の家」の代わりに、曖昧に「蝶々夫人ゆかりの地」と命名して、今日に至る。新聞によるさまざまな広報が効を奏して、グラバー邸を一目見ようと観光客が南山手の丘陵地に集まり、長崎市も戦後の貧しさから立ち直るためにグラバー邸を始めとする名所の売り込みを始めた。被爆都市が繁栄への活路を見いだすこの努力は、昭和25年（1950年）の「日本観光地百選」都市の部での一位入賞により報われる結果となった。

昭和30年ごろの絵葉書。歴史を忘れたかのように、「グラバー邸」の表記がない。

その後長崎市は、旧リンガー邸、オルト邸を買取り、また付近の洋館を再建して、人気のある愛知県犬山市の明治村に類似するテーマパークを建設する計画を温め、昭和49年（1974年）に「グラバー園」を一般に公開した。

今日にいたるまで、「グラバー園」は地域経済に多大な貢献をしてきた。なお、グラバー園の入園者数は長崎の観光産業の景気を示す重要な指標となっている。長崎の観光産業をさらに活性化するためには、古い建物の集まるテーマパークというグラバー園の従来のあり方を根本的に見直し、史料の発掘・分析・活用に重点を置かなければならないと思う。トーマス・グラバーと倉場富三郎を始め、旧外国人居留地住民の生涯と業績に関する研究は、日本の「世界への窓」である長崎にとってこれまでずっと活力源となってきた国際交流の振興のためにも有用な情報を提供するであろう。

最後に

トーマス・グラバーがこの世を去る８年前の明治36年（1903年）１月、編集長あての短い手紙が、英字新聞「ザ・ナガサキ・プレス」に掲載された。以前、同紙が特集した灯台に関する学術的記事に対して寄せられた匿名の投書であった。以下に示すその内容は、経済大国となった現在の日本の国民に訴えかけているように思えてならない。

編集長殿

「古代の灯台」に関する記事を興味深く読ませて頂くうちにふと思いついたのですが、誰が日本最初の近代式灯台をつくったのかを、現在果たして何人の人が言えるでしょうか。日本最初の灯台は、薩摩大隅半島の最南端にある佐多岬に、Ｔ・Ｂ・グラバーの指示で技師Ｔ・ウォーターズによってつくられたのです。その後しばらくして、「横須賀製鉄所」を建設したフランス人技師たちの手によって観音崎灯台が完成しました。

以来日本は、灯台建設のみならず全ての分野で長足の、いや未曾有の進歩を遂げたのです。この国の真の歴史を述べようとするなら、世界有数の国家となった日本に対する、グラバーの測り知れない貢献を避けて通ることは出来ないでしょう。

まずはお手数ながらよろしく。

一居留民

1903年１月10日、長崎にて